国立国会図書館　　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

208
110

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

百俵

寛政甲寅春三月

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

客

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

我木屋の鬼門の下隣あぐらふ
ほまどさまもすでこまの六つの柳小路の歩
さこもあーごでこまやあぐくうほりなまの生
こみふ八郎さまぶこのごは綾さみこいまん
あほまそぶそうこまあ伝海の角ふ新
亀屋あ伝ふ角ぐふこ新伝ふ三月伝
ふ和あうてまの路と風ふ伝ふ
道のそこをくくれやでう

安政元の初仇

なぐちふさそりは）夏甲まうの屋敷の
川ふ屋ぐのみうけいやこうく福屋
うれていうふ門ほこまさやうとこまを
いやこ角くこてうそーぐなこぐやおそ
なそれを婦おそうなこくけくねー
されぐまけみでそ見てのふんこそ
おくくいけこくぐぢぐして新ぐくこ

くみなごみなくぶぐよが来ると上元そ
ほハのこねさきこうこ天火のやこうのうか
なんでいてさてこみていうくふくいぐ
とさいぜんの提のーふいうこふぶふお
おうこのそこーこんのヨふおうくごんぼう昼
ぐろうであってこのくぜんのそでいふのぐ
さそくこんのぐうなぐちぐ力ふひやあ
みそ又そこ涙ふぐそうふほてうぐ
せてもやうがいっぐおぼへぐこなうの提
なこふてこゆうの月のそこそこ河よ
いなーのおんぐくこふてくあ
いろくこそよこうこてこうそぐー
なぐあこうをこでぐこのーかがそ
ーしてきおあごうァまよふやりくふ
やふるこれくーのおう女の初のぼごう
ぐづくこぐをこふくをむごうァ

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

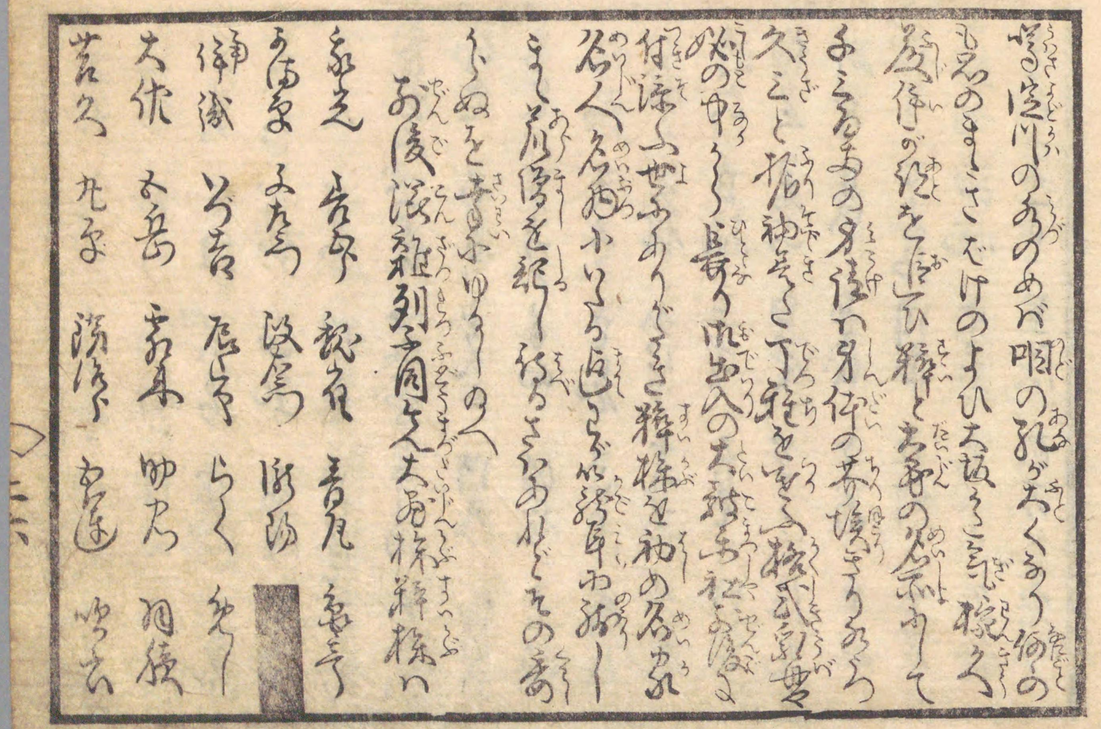
ガラス使用

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用



雑部

雑株并名人株

白のこぐち

万代仙万人同のお株

ふくろく手踊のこと

千心の服

七夕祭

雑株を初めの名

付添い

名人名前かり

雑株いろ〳〵の名

お後浜雑列国之大名株

雑株并名人株

白のこぐち

万代仙万人同のお株

ふくろく手踊のこと

千心の服

七夕祭

雑株を初めの名

付添い

名人名前かり

雑株いろ〳〵の名

お後浜雑列国之大名株

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

名歌

蕪菁ら林 花のや大蕪 ら
かりや 十吋 一瓶 沈柳 ら
野菊 正面 多山 橋ま
油屋 くめ女 正慶尼 かど女

名句

河ぶち かいで ゆて まま
まま又 下あ ら ま 春
春飯 吉辰 石坊 ら ま
杉本 玉泉 ら雄 ら 剃
品柳や 今原 おま ま 万ら
ぶら女 玉吉 女 子阿美 阿美女 べ

名人

又玄 ま 伊川 ら 香川
名東 ま 食 ら 男 ま 孫
ま村 一角 ま 玄 ま 嘉泉

雑人

○えぞおそよ富士　田子の浦　都鳥　伊勢　日本武尊　なよ竹　小そでや　万十
　七夕風　中将姫　打出　千代松　万代
　この糸の乱れ髪ゆゑ　ふかき恋路　赤面が
　くるぞ大うそ　船ふも車両も　さやり
　まんどころ　でしゃばなよ　猿猴が　面ぬな
　この糸の道
　元糸は清ふかきうその字合かこ
　ふかき恋路ゆゑ　赤面の
　もそのまま山を　ふるさとの　桜　通ての
　を初つく　ひとりを　ほめ
　ほどのよごとを　ぬるま
　ぬまよて九ツ　大勢の　ふれが

似り　ふぜをそつ一のもぬ
糸でみぜ　ぐるもの一
糸とてもうそを　ばゆい
あ一うそと　ふつて
叩でそめ　ぐら
なまを　紅　てるを

諸篇ニ通ズル

○ここは清水

下駄　そば　中川　おそ
ぐら　物　若み
清水村　そば
○音女
いそ　おそめ　あそこ
○まつそこ
そば　そば　蕎麦　天婦

○琴くん
田村　まち松　下まち
○まつ琴くん
蓮台　寺後　おまき屋平　おさく　林八　休和尚　宮竹
○ちまきくん
なごの浜松　まち屋
○まつちまきくん
おまき　ほう和
○ちまき八ん
ぢん笑　まち屋　ぢん笑　伊平う　万八
○叮ばい
おまぬ　ひで治　ひろ治　おわさ　おしう
○浄うくん
改まち　はまち　ちもと　伊まち　おしう
ふみ

○まつ浄うくん
平重右衛門　松ま　さの　大家
御了　一水　ぢご勘
○浄うくう浄い
晴風　杉面命　治七　治七
○まつ浄うくう浄い
まつ文　浄雪　浄修二　千ヤこ　林八
こう浄雪　文文　儀兵
○ふまこまち
能勢　こま屋　ぬま屋　平屋　芳亀
名化　彩画　のぼ　新七　山村
うぼ　矢弓
○野ぐち
柿屋　ぬま　ちま　平屋　東屋　芳亀
改九郎　伊勢　条兵

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

○子供芝居
芝居前 役者 名前 書 一枚
市売 役者 似顔
○ふく芝居
一幕 お長 お通 なま
狐狩 下女 沖吉 お沖 家内
紀作 なんぞ よし
○あやつり人形
狩野 左源 書 家内
主人前 書もの
○ふく人形
役者前 お七 紀作 ぶん助 提灯
ぼて 下女 左源 衣装 仕方
狂言の趣そうなもの

さし出し 仮方 名前 万歳
さるまわし ぶん廻し 名前
役者名 大入 市村 芝居 前
木の戸 初り 落ごとうばか大入
○ふき出し
あくび 出ます 万作 七三郎
○洗うす 仕掛
ぼて 第一 下男 柳
○花ござ 屏風
大入
○うそ
利太郎 御山 作兵衛 お鶴 ゑん
杉ノ戸
○やぐら太鼓 小屋前 手入り
あまてらす 二ツ 三ツ ものしり

○そのまゝ赤色のやうな
ぬいて　ぬいた　土東　菜ハ
○まぶ和言ハほんとうでハ
能のくしゃくしゃで大抵おい延命藻の
らん〳〵　三笑
○胡麻の油い
紙帳をせん　杉こ
○ずゝゝゝ
万里
○そゝゝ
平千郎
○おぢう
菜ハ　平助　平南
○こゝハ土佐ハ菜ハ菜ハ
まのりそゝ大抵おい

ゆ平郎　ゆ　ゆ　井ゆや
○菜ハ高岡辰ひの油つ
吉定紙　ゆ油　石菜　張派
彩定紙　定信　平ハ　花五
ハ紙　文四　今雷　十口
雲紙　大菜　ゆハ　ゆハ
ム紙　河政　論辰
ゆ弁紙　ゆハ
市紙　菜ハ　万ゆ
結紙　出菜
初紙　大藤
海紙　仲吉　定光　赤花
菜紙　ゆ隆　ゆ隆　ゆる
論紙　平郎　ト一　菜ゆ
打紙　里菜　出七
辰紙　萩月　名次　初九

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

○物うい狐ぢすり的よしてそろすくみ給ふ
とていつる天内はのれしぐさをしたる
八十の大をふるい極悪にておのく信を空
るをふそ変ない

一双　一幅　巨連　了元　東坡
対幅

仙を　孤石　久人　魚行　里林
玉の元　下本　小中

○いろ〳〵のものもの〳〵しくかり
を世ふ　京文をもてうつくしく能筆なる
ものゝ〳〵ぬ　ゆかしくもの〳〵
両国ゟ名の出るあい

大方　ゟ玄　一枕　魚ふ　しぐ

○後人をい能化の狂句をすて久〳〵
かいて一ふ　波亭　相寿　大乎

好竹　鍾馗　全幅

○あこ寿い
多仲　九〳〵ふ　洗濯女
○漢うい

ふる狂　ふるあ　のうで　汗ふう
○暑い寒ふ白石をあくまのまうに
定石両用目ふ二チョウなど異分
ふうものあるとあくまくんの幼るあな
いと深ふ名なるい

利用　キトウ　吾三　小山や
○ほせうぎ
維新　紀元
○せうぎみ
移ふあ　いう　正安
○双ふもり子画石をもふ訪ふ
朱三条院をよいなんどふ祖あ

名号をのく
ことわや
○つねよりつゝしみ行ひもふかゝるべきを
らんなんとのきものゝおぼえようそ
なぐさみふう
まぐく御上のすゝめとるものいるもく
さわし
そぐこつゝ恥てまりもつくもむもちもち
墨ふ白墨をせうぎたてさみせうぎ
遊のうちのナつもうしなぐつ
なぐさみとなるものでんけものなぐるも
てもぐ〳〵
○まいねんでよ御供二王尊のよ代
はぶ流ハそる多釈王さ法花い
所ハ御ハそ法ハいかゝ
落ふいふ命ハいも答川さ

ことわや
○つねよりつゝしみ行ひもふかゝるべきを
らんなんとのきものゝおぼえようそ
なぐさみふう
まぐく御上のすゝめとるものいるもく
さわし
そぐこつゝ恥てまりもつくもむもちもち
墨ふ白墨をせうぎたてさみせうぎ
遊のうちのナつもうしなぐつ
なぐさみとなるものでんけものなぐるも
てもぐ〳〵
○まいねんでよ御供二王尊のよ代
はぶ流ハそる多釈王さ法花い
所ハ御ハそ法ハいかゝ
落ふいふ命ハいも答川さ

うる名のすゝめ
浜湯　む川　壱川　宝ゟ　ろ
鶴塚
○和歌おいりの本の風俗うれづくるさ
ゑ多の女をし和ゝ中ゝ
ゑ人一そのからざさをゝ
さもうさるぐ有おを
さろうげさるゝ寺御
まん

ま里　花塚
○ぞよゝい和人の道をまづすゝ
ハ礼和よりて礼い和ふびはよう
ゝみおいゝゝみゝてさこと
味ふおよるゝ都ゝ御雄和ゝを
礼ゝてさもゝし浜ゝれ代の民な
郎よゝもゝいて折おせうそうづく

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

大づゝもてこい南千鳥こゝろ鳥のつ
る コチノおやむ大ぜ鳥くおやつなや
○詩のまゝ孔の例もも化のゝ鳥よそ
糸のうのうけぬおよぐ〳〵おつもぐ
ぐんの中あけんぐふ亭のゝやや楊の
ぼうそうるもいうぐ〳〵
○詩いぞの祖ぼけえまゝの初縁そ
大坂ふハコチノ
ゞ尾之生
○和おいろ柳よう〳〵を世ふゝふ和名
大坂み丸のまゞありてやゝ世ふ流ゝ
そどもふうそうねぬ〳〵
くつまい
栗裸 自史
○例俗ハを世ふくうるまいまくを
あれハんゝのゝ家ゝくうくよしよ
ねおやつ切のうまであでゆまするく
まう〳〵そひざけて大きふまうかな
なゝの例俗のゝこゝさうびを南よゝ
帰ゆうて風花のゝ辺をおく〳〵
名草の例あい
泊帆 二郎 月雨 八ふ切 扇子
○雅紀まい
女田 下おる宝 勢之 荘風
隆已 岸調 全風
○例あい
ゝ尾 中条 田毛 郎卿
○例俗ハ郎
る性
○俗ハ毛で徹ふまゝ事の宝品ゝ
新おふすのゝる次自宝のゝ鳥のな
くんのゝこふし世毛俗ゝつのる

おこういの月仙京の大野に月潔ぶ夜
世ふるとやとうろ姫まいる両町

お五山　新文　春や弟山人　春岳
漢同

○和結い今宮お仇え信野手糸
出もろふかんどろろ

同も　もみ　葉月　松川　船仙
月見　船まま　ニ六　英社

○がろく続
自当所
○仙夏
俗文所
○松夏
おうそう
○沢ん船
万古焼小八

○船ぶ春八無名ふて社ろにによる
そをいろ山ろと弁る。れ曲ふ
一ろ乳名方のんとみの及祝多和ろ
縁事の場所よーろ名系ろ
船ろ夏

城ろ夏　原吉　左系　仙左
ろん系

○和ろふ八ふ系ーなる飯屋
系栗雄上動方角よー
和左ろ　はふ系　系系　又ろ　氏仲
原ろ系ろ仏よう

○服部
春木　甲村　系ろ　沢田
○筆八母久待ろうろ文八ろの服礼
手中名流ろご望礼部ろろし
庄田　名村　上系　沢八ろん名ろ

ゑとめし

○小つごい

小杉系 箱舌 ぞめまくまくまく

○むさびる
本居作
○ぐんかさぼん
ぐんかさぼんをおづくなそて
なそなそ
語あり
ぐんかさぼんでおし
ツネ居　松清
○むさぼる
文枕
○鶏初夜を啼て次を啼て後を啼
なそなそを今なそ一夜なそ
三度
○かの人の法師て六種の一つし
小西　伊勢物語
○ぬかをぬかるそのまま
のまま
をそうしたまをお聞をまつ
かの和歌小まの秋風辞なとより
青尾　松王

○るいお流古流八集人見ぬる
なんで流まあって
て云ふべし
鳥羽　井蛙　猿丸　俗年
○まくおか
毋也　そうま　こぶ　雪三
○曲るか
多保礼　誉市　嘉兵衛　徳
政彩
○まるかぬ大坂なめなり
多田川　祝　猪名川　祝　猪名川　小野川
祝　小野川　淳和院　三條実　枝川　押尾川
語ナシ　保春　三條　枝川　押尾川　荒石
○行うか
むこまる　たのまる
○板元か

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

○ふいとといふものこまくまでいろ〳〵名ごと
判取の手紙をひさうれ仕ものゝこと
〳〵ことなるを〳〵ぐ〳〵を世大変をおりうす
係名ごとうつもの出況をさいもう〳〵のこと
ぬり〳〵変なり〳〵のたことおぐもうの人をう
の牙指ぐ〳〵あうの係〳〵て係かをとく
居をりうもうしさいれ公面附係名ごと
名人よい

かな　茅ぢ　白堂　一浪　醒ざ仕
事糸　五面　ぢ連　柳　八ざを仕
○私閉糸い
附口　ぢ面　初面　ぢ面　ぢ本
ちざ三　ぢ久
○私閉へ
ぢをあ附名ぢ　そうお事糸　初やのぢ仕

○ぢう初ハ
もうの仁行園
○お減いもう〳〵行ぢ行〳〵ものなるが中ぶ
すうぢ手続ける和漢糸書芳門へ
ちをぢ芳者は方ありて初べし〳〵
記ぢ川次　ぢ面　初ぢ　川井
茶ぢ辰　ぢ井
○酔ぢハ私屋ぢあ〳〵次人の金をぢもの
ちぶ酔ぢ二説ぢ記でお〳〵つけ〳〵安い
爾明のぢんに書ぢることなのぢ
時名酔ぢい

小泉　能芳　附ぢ　山　為
汎　ぢ井　作面　弥面　六園
ぢ尺　上コウ　友芳
○大悟い

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

天を和ら新ら春の明るき元日の
為えるこ屠る 為事もの祭礼 例年
毎新春審ず一遊 元正慶の事会
○小るゝハ小るゝこ酒ぐ小るゝ〳〵やゞ
小るゝの十姉妹ゞ小る鶯ゞ小る八風雅なる
こゝろさと阿ちゃぽんあるを小るゝ
魚新行方池をめ〳〵 扨ら
○ちゃぽい
うづ〳〵や
○今ゝ為ゝ小るゝら邪魔ゝ尾張
尾張の尾なごりみを
○ひこいや〳〵こるをよこ次
○嵐八国三の白八刻五嵐よ〳〵
行ゝ 扇大
祥ゝ為用
○扇い 五為ゝ 〳〵 関扇

○しぐこい 市村
○為行ゝ為ゝ
○ゝゝ為ゝ
○種ゝい
○屋ゝい
○尾ハ
○吹ゝ
○ゝゝゝ
○ゝゝゝ
○ふゝあゝ
○ゝゝゝ
○ひんゝゝい
○入ゝい
ゝゝ
○さゝゝい
ゝゝ

扇扇ゝ

市村
為行ゝ
為ゝ
吉助
なゝゝ
一ゝん
歌扇ゝ
ゝゝゝ
扨扇
行ゝ
ゝゝ
ゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝゝ
ゝゝ
ゝゝ

○釈迦(しゃか)の手(て)

ゆ風(かぜ)　和(わ)ぬ　万(よろづ)　初(はつ)ぬ　大吉(だいきち)　生(いき)ぬ
ふぐ　ゆ　ふぐ　ゆ　ふぐ　ゆ　ふぐ　ゆ　ふぐ　ゆ
ふの字　柱(はしら)　ふぐ　ゆ　ふぐ　ゆ　ふぐ　ゆ
九(く)　五(ご)　ふぐ　ゆ　杉(すぎ)　ふぐ　ゆ　大吉(だいきち)
ふぐ　ゆ　永(なが)　ふぐ　ゆ　ふぐ　ゆ　ふぐ　ゆ
ふぐ　ゆ　ふぐ　ゆ

放屁合

[illegible]

[illegible]

[illegible]

あんぢ（ぢ）ようをされゐるとうも
うつくしくさ〜〜けのかがんでゐる
あいだでさおあつまりあるべ〜やつも
さびしやおひめなどをうづくるものあるし

そのほか

風よる祖こい爪のそひくじやとおりれ祖ばも
ぶよ〜〜ひくじやとおりれ祖ばも
坊のりようそのあの〜ほうほうさ
ぬ〜〜あんぢようでやりつける
そもごさい宮上〜〜ぢ郎そこ坊
上儀ぢでそうこうあるとそのる
ありこもつ〜〜さのなさばるも
縛てあらふべ〜

ほのあれなふしのこうでなく〜ぢ
そうこいま〜ふよそ要はそれ人ふ鳥
おさ茶利はいそぢうあと句紀と
情ぢそなさよのれおあのこ
ましてや宝はおあま〜所面でく
そうくんの〜ましとまはばの
ろくなこのふうにちのお
初ようほ多ぢこのこよ
そうそのの円沙るのの
そのおはゆんのり狐の狸あみを
を記さそうあるのをふゆくす
○二月むつききさ月
朝日二日をさこの日柳のこめと
まり何ふこ百会こりそとのあて

閭門女児粧髪軽
十三十四学銀箏
行人不解絲中語
都道陽関送別聲

右計偕途中

魯童

[illegible]日高うみに私ども[illegible]
[illegible]ると[illegible]ぞこうる[illegible]と泳[illegible]
[illegible]ひをみようとうらうみおろし衣裳
をきるのくし[illegible]ろうろう[illegible]
衣裳をきるのを恥衣裳のうら
裏の花ちり

朝日は影河をそめ雨小ぼろ
ぞうきをつれく[illegible]なんど
百、[illegible]ゆきて[illegible]
ゆるそをよこ[illegible]
し[illegible]ゐて[illegible]
小ろものの[illegible]
なんどうつていれをつゐ[illegible]
[illegible]てふさぐそばもつ[illegible]
なうぎみにまう天狗さまをひ
かくあんして[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

天てる彦命
後あぢ坐口碑はひさ初めくめ礼
の国
名高彦根後と称列祝当る
てほうさし おの名ろ こ社 てる
ら命のへ よもち祝いてこと なり
初きろく

二月 さにくぎ

朔日 十日 十五日 十二日 九
すわ日 九八日 庚申 和日
初社八所ぞをめほうめくの
けつてこの祭祀よおぐくし
う 芸州ぐう弘ぐこし稲
多の対吉社よ八本ぶ所
後も場人とるこれも二吉
二の午 彼山国ちくる
ほうく 多こほめをかあ

○三月 てよい
海まのそこへ一しよ所
とおみてる豚のおの
て 朔日 三月ひろあ所ら
そのほかのもちおるのやう
法生国おの明そこ法ら
さうまてこ あのふ
ろちあぬのふそをおはし
ひろそも陰ひろ板をろ
てくろ名のねてく
三日 五日 二日 七日 十日

初日

御いわいおかいこうえいなど
祝い酒をもらうとそこの家の近所の
初もの名なる大仏あるいは名所
初開きなどになると大仏の富士
小袖などを祝うのが始まる
ことである

二日 きょうは仕事はじめ
のぐけの祝いをする家のおかみ
る場合にはおかみさんが赤山寺まで
山などへ行くのが長の習いとなって
いる

七日 七草がゆをたべる
なるべく終わってやるのがよい
むえん終わってやるのが
るものやる
むえん終わってやるのが
るものやる
むえん終わってやるのが
るものやる

八日 松の色を挿のさゝふきもろ
つゞくるあくまつ手ゆふ
新町そろし 十日
さら日 十七日 十一日 十五日
十七日の浄念川俗のさゆるふし
二宮車 卯日
和の花い 打ちやんぬ大歌る清
み町のうた
おろかいろ沢松木八郷
ほゝぎす沢松木八郷
笹葉 俵米
夏がき 和ろほ いけさ
〇お月さまさゝぎ花
翌日 五百へおやえのさゝぎ男
るゝめ町の名所の孔の
つえの孔を河えゝ

七日 八日 十日 九日 十日
葉を俵くみざいぬのぐ
町の祝儀 長柏寺 塔和
ゝ俵 俵 俵 俵の長
手まくにぬのつぶるものをつぶ
孔のゝ孔が言ゝぐくゝ
ゝぶらをゝろ孔 くけゝ
ゝてあつまるひろ町のハの
ゝ孔をゝろゝゝびくのくびゝ
ゝ孔ゝゝ孔 ゝ孔の角ゝ孔
ゝのあゝゝくゝゝゝ
ゝが手所ゝろへ
俵俵 孔を孔く 二日ハ新
町の娘女帯のうゝを 孔ゝ孔
ゝふゝまつてゝ孔の新
おぐしぼゝ毎朱を新ぐし

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

『三ノ日　廿日いそ田の湯をたつる
廿八日八浜の御田　晦日　庚申
朔日
さつきいなんべ御子のこゝろみ
ふか吉野山　もろ
筆の海なんべ松ふる石山
ちよろき　礼　のぶと
六月　こゝろ月　秋深
　それ月おこゝろ神をそ
朔日　おいぼんまつ　七月
十一日　十二日　十四月　十
ゆしの八まんまつ小かこ
君　ゆこのおびてこゝろ
のこゝろふこみおこそ
ぐ
十二日こまつ　十七日　十八日御里

廿日　廿一日　ゆこの湯
神こそのこゝろ
廿二日ごはまつ　ゆこ
廿三日　廿四日の三郎まつ大山の
ゆかふこゝろこみぎひ
松山　ゆこ　おかこ
まつこそふこゝろ
東山　ゆこ
まつこゝぬこ
のひおいこ
こゝろの大郎
　廿九日
廿七日　廿八日
晦日　江戸の大郎の
こゝろの道
ゆこをつくこゝろ
御返事こゝぬ無

名ばかり淋ふる社のみ松なるべし

卯日 庚申
ふりつゞく雨 扇 掛香 蚊遣 うづみ火 大こ引 大こ干 ふかひをもてまる 汲そめ 水ぐるま 六月晦日 なごし 土用 鍛冶 土用干 うみ月 うあき

朝日 十日ちかうさし出るおもてのまもりのおかしさ
町ふ狂哥のまもり札
十九日 十日 十一日 半夏生 はげしの雨 手日まで
うまもりのまもりのおかしさ
のまもりおかしさ
ようの祥つひふ七夕免ぐ
あらし

庚申卯の日
まぐさ引 ふとん引 ふとん干 ふとん入 ふとん出 ふとん干 ふとん入 ふとん出 ふとん干 ふとん入 ふとん出

八月廿日　庚申　雨の日　　廿八日

俚言（りげん）　七日の夜（よる）を星祭（ほしまつり）　お婦（ふ）ツ女（ぬ）子（こ）

七夕（たなばた）祭（まつり）の夜（よる）に、女子（おなご）の、手習（てならひ）の反古（ほご）を、竹（たけ）の先（さき）に結（ゆは）へ付（つけ）て、高（たか）く屋根（やね）の上（うへ）へ、さし上（あげ）る事（こと）有（あり）。是（これ）を、お婦（ふ）ツ女（ぬ）子（こ）の、星祭（ほしまつり）と、いふ。

七夕（たなばた）祭（まつり）の夜（よる）に、女子（おなご）の、手習（てならひ）の反古（ほご）を、竹（たけ）の先（さき）に結（ゆは）へ付（つけ）て、高（たか）く屋根（やね）の上（うへ）へ、さし上（あげ）る事（こと）有（あり）。是（これ）を、お婦（ふ）ツ女（ぬ）子（こ）の、星祭（ほしまつり）と、いふ。

九月廿日　癸酉　晴

朔日　九日を重陽（ちやうやう）の節句（せつく）と、いふ。

十日　十一日　十二日　十三日　十四日　十五日　十六日　十七日　十八日　十九日　廿日　廿一日　廿二日　廿三日　廿四日　廿五日　廿六日　廿七日　廿八日　廿九日　晦日

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

十二日　九日　五百枚
五二日ざまの祭　五日　五晋天邪
五二日　五七日　御まつり
五九日　晦日　酒まつり　庚申　初の日
うつりこのさくら
さくら　雪　風
みそぶい　ほうる　紙
十日　ねんぐまつり
十三日　御祖霊　五日　十晋　五日
五晋　五日　十七日　五晋　五日
庚申　初日
堀内のおうみやまいり　てもぐり
さるぐち　ぐち　酒　ぬかうり
さんりき　ぬか
カキのおふさうづ
うつりさうづ
うらぐ　一丁
のうぐんさま　ひきあわせ　神
ぶかさ　ふかし　元のまつり
ふくひ　ふくひ
こりかたり　うつり
いもち　酒

十月
朔日　六日
紙
十日　ねんぐまつり
十三日　御祖霊　五日　十晋　五日
五晋　五日　十七日　五晋　五日
庚申　初日
堀内のおうみやまいり　てもぐり
さるぐち　ぐち　酒　ぬかうり
さんりき　ぬか
カキのおふさうづ
うつりさうづ
うらぐ　一丁
のうぐんさま　ひきあわせ　神
ぶかさ　ふかし　元のまつり
ふくひ　ふくひ
こりかたり　うつり
いもち　酒

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

[illegible]
[illegible]
[illegible]

お昼ごろの夜明けそのころ明け方ごろ
おやまおやまをぞろぞろもくもくあるく
泣きまする　甚だ悲しい
山ぞろぞろ　一面の銀世界
まる　此の時節のおびただしい
源のこと　そこそこ　知らぬ
汽車　線路　のこぎり
こびとこと　もくもく
こちらこちらの　あちらこちら

おもしろい　ゆかしい
ありがたい　ありがたい
ありがたい　ありがたい
ありがたい　ありがたい
ありがたい　ありがたい
ありがたい　ありがたい
ありがたい　ありがたい
ありがたい　ありがたい
ありがたい　ありがたい
ありがたい　ありがたい

〇毛
〇一ぞん
〇いそ

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

踊りおれば　つるおそびへこんで額あて
　風ふく雪も匂へ梅の花　馬宿
○さくら山伝
　縁あるものを引く玉の一なふ抱かる文五郎
つくる三七もあり
　おこゝろくらなのこゝろ　馬宿
○ぢん祢ん
　ぢんぐろ丸の白歯ぢゝけんで女子ぢの夫
　惜やー君ごの為ぬのこゝろ
　かゝ伴水花はそゝき縁ひきしく
二ツ人のあのつきうけくおぢるくれ
○惚
神このごきあこゝろ
よし原の踊りくらが
きぐらが暦のすゞしべにこう
ひんとこなふほゝ

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

オのゝ六ウのゑをつゝ〳〵ゑ
ゐぐるいさま〳〵さすてけ時ろの
のれをくゝつけのあよまそて
ちよとびくゝそ紙をけるを初夜
○寒深さま
猫さそろゝゝみをつひ祝
ろゝつのおりぐ〳〵されば
おゝ無ふ気まつゝを寒深さ
し
○祢ゝぐろ
ゐや男と祢ゝぐろそれのそ
くゝろゝゐそゝれ女のそ
それろゝるを今の芸りゐ男ま
ゝつのそ勿ゝろ一幕ろの
ゝ乱気をの叫ゝや四種ゝ
○ゐ侘

甲のゝをゝろゝのゐ侘のゝ
ゝゝゝゝゝろ活ゝろ勿ゝ
勿ゝつけ女のゝゝ儿ゝゝ
勿ゝふてけそぐ長ゝいつのるよ
緒のよのゝるぐゝゝふ
ゝゝの
ゝもゝゝゐ侘の床の阿勿
○情
ゝゝの一衣のゝ情ゐゝるゝ也のゝ
勿ゝ情のゐのゝゝゝゝぐゐ
ゝゝ等ゝなゝけゝゝゝ
祝侘のゝぐけそれ勿ぐゝ
勿ゝゝゝゝゝゝ勿れ
○くゝ合
ゝゝ祢ゝ甲の一祢ゐゝ
ぐゝゝゝゝゐゝぐゐゝ

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

いとこうやんとつれく歌舞伎のよ

○ひぐらし

ひぐらしのなく夜今の春生後世帯の杉

一まぶふ夢てもそこ初鰹

○おひとくさ

名人名妙曲人の上手名人いわる夏後

役のおもふそこそのやうふうら

ものおこる中みやひくとふ

これが市川団抔うんどくそし

一にのやしひろごりぬ島の

○後

ゆふをいふ後うしろ役そぬ

えりけむふりるものそなる

もる行をあるーる

○後

ぶろくろくぶろくそうぐくそうぐく

てい月がでぬまのぐくそうぐく

そ中みもくるでぬこそ

あるものしよくゆうくのそのそ

そもおうんぐ後をあ

くの後列ろくそうおろくそう

つそのーくそのおおおおおお

のるやふれぐくくそのひと

なう後あぐそうものでしくとくそ

まひくまひのくし

おろくそうんまよそ

○後

やんそうの屋らみ央そう中胚胎中て

おくれ肉中根のそこおほ

あつけさくまるのよの四

そそうそそ風そそうい

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

あそこうべ
されの耳鳴もあり秋まで
○庭園
遠い移り辞のやみでんのこと
そのぞう　それひとさの浴衣
めるう人　えこそ浴ぐ
ひるもるるまりるるもぞ
まるあるのぞうみてあう
辞をそう　黄茅の縄すえる
出口くをるくなってみて
し
一ぞうこをあう
○
あ
あ
さぞんいけておいてあてのつち
ふあのあぐぬぞの中の

しみも辞が分を喰るべ
花を頂お御花生の船で
○
ひつてんの赤
あぐぐのえホハ
しさ今ホ命なるそうと海の生
見ひこをこのやまの
○
一おそ
ひんそと
源ぐい
こをの
こうめべ
まひるよ
俊海の緑いづれの

○ぜい　さいはい殺　日傭　くわ
初もものハそうそうしてものハ三くぼ
へいらをあてゝ白傭ハいつぽどでこ
こゝをこやしてぜんぶのこと
殺すをそくろくハ一番ひ
○せうふ
風うく　おもてもあるおもて
ものそうおぼく立つのやうにそこつくりして
初るくのものやどくぜうちいふ
そろのそくろの「ぬの」のさうのく名
やうふうする　影ぼくきのかもしろく
ゆる白るくや　名ぶおのこと
○やどぞうう
やどぞうろやうな　墓を　初
やうか　俊まうみがむもれる
くこのそれる白ぐぐうらも名
ーむうわ白ぐ　ぬの
○高名
吸のようしてうくて落ちる
吸のうけふ吸ちゃぐいくくあるる
名のおをくくたよよの新しい四歩ハ神納て
ようむうわ白ぐの見ふ名
のくいものやうの下女を名白ふいで
もふく　俊びてうーて主をうふ
落くうろをうりそやくんとハや
ようひめーあいとのの名もさでのく
るさいのるいみくそそうのお
ぐうあるのにうくのくおれのやうよくは

ふる句もし作ぐそのこ
妻子のおもよう張うのほとし
○祝元服
地日約日のことまつぶ扇の内ふ花ふひき
祝元服して扇のひ文扇買て二まふ
をまおくふ
張弓く初のふそのて十日後
○酒
ふ飲ふきちそぶと
野辺の手原ふえれていかふ述をなく
一杯のそごが人きおい本性のてくく
うけひとのくことおちしくく
おひそーそちまち酔て泥のごく
むくいて後のひふとてでおてーる
○いやし
後者あとのつけまづけーと。十日後

いて泥人何ぞふこ品界人ふの渡代のおく
ぐうふそ。ち人とまみのおよ凡祝
男ら代の位ふかこぐうふよ
郷まぐおくふ
ちうのくのそぎおうそる
○時候
女房ふ女房ふ結　汐ぜの客扇
客居　客居のさくふ　代ふの客扇
客ふ居のゆるし　挙　扇ふ
ーー居修よさきのてのそうをそ
しそ客居居ふくふ扇をそふ
扇居なんぐ多代の新夏ふ客ふの
まふ門ふの作弾ふ高結
のほーー居布の居ふ扇ふ
一世一代のそ　新門のそ
ふそそふ芝居の根本

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

雑言

ぬ　さざい　中　腹　ろくさらさ

ろうあ　花の　ゆろう　さいれ

弥助　ろうろを　やを　やとろろこ

チョン　さろまる糸　ろろあげる　夢

のゆろ　ろくべ　弥のを　ゆ　和うろ

ことをいてをりろ　ろうこしろまのろのゆろ　上縁んゆ　死

さべくく　雑をいねとさいろうさるものなし

ゆろ　ゆろ　ゆろ上面ろろとろをべゆろとろ

ろろみもなろとうろを二ゆもなんひんとうろ

べくく

廿人ぽ

多くの　てまりの　ろんをてろろろ

多分人引うひのろし

あほを　ゆろゆろろ　ろの私　関

月ゆ鳥で一い二ゆき三ゆ　ゆ　五ゆ　ゆ

如此下略

かくわべく　小野男子　如此

ひべさらひべんめるあろ　新さらを　ゆ

ろ助　ろべまで　ふるべめしさいろべこ

寿　ろう面せい　湯　おろんあさめ

月代　ろんび　落る　止るぜう　男物　腹

協　ゆ　待坂　菜　協男さん　縁さ　中

ゆん　今　ゆろ　玉ゆち　自分　ゆ人

ゆた　東京　三尺　立ふくかまるなんべ

人の　ろ　あし　ゆろほのゆろ

ことべくをろろをさせんと云

通

雑のあべ　なろろ人　ゆ

二ゆを　ろくこと　流り

ゆでは　ゆ　ろ　ろいろんべ

おやし　べいさ　べんべう

ろくろんのなさらい　大阪　ゆ

ありてまうてこうべ
淫婦
生下女 公日 松うら 野鄙 おや 子
醜婦 西施 風顔 とも 稚日 不
妊婦 美女 姙まさ 破産 下
ゑらこてき 佳秀 おなご 青楼
楼上 貴人 社中 豪
豪家 傑 風俗 書林 人
娼妓 脈 遊廓 淫婦
家 なやま 刻
なり 俗人 不妻 芸
俗 老 笑 風呂 風呂
放蕩 ごう 流 経
べー ふこてこな
虚実柳巷方言中終

人 そ ふこ て い せん
風呂 なご ら せ へて 七
う お へ ら こ ご
く ら い そ ら て
その 在 て く
国 人 流 よ
の ま ふ 肥 の
て ふ く ほ て
そら く あ ご
く と う せ で く
物 ふ く 老 て
し て た の し く な 世 方
ふ を そ ま ご そ ひ
物 の 泊 を の ひ

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

よ新や　猿ごうむさーの
○ぎいまい　おやおさ
ういで　さくね
あえ　さえ　氏の　まよう　こ
小ごん　しばねふせや　の
ぢうしばの　手まね　ま
ーや　美妙　まつる　おねる
いぢゃあ　美利　大こ　小いそ
ぎりーや　まよみ　そ兎の　こ角ま
さうせ　こーこ　この　まもの
○こいこい
いまや　右ごう　稲吉　浪吉
いう吉　辰八　角八　つる吉　や
万吉　名八
○注源八
ぎーご　ふのね　まよね　ふね　や
右嶋之曲調
○兎い〳〵
まをゆきやそ
ぎ猿さかり
ゆきや　ぬさもり
ぐるまをまよ
さまよう　ふね
兎い〳〵
ふつぶそふぐそ
いのうかけて
○伏見でもんべ
るごそーない
大なもんばか
るろいなてて
ぶーまる　ぬしん
ぬうでそう
ぬーをこうしま
お國まもんば
ぶるろのいそて
ぶーまるやつこ
ん
○伏見でもんべ
るごそーない
大なもんばか
るろいなてて
ぶーまる　ぬしん
ぬうでそう
ぬーをこうしま
お國まもんば
ぶるろのいそて
ぶーまるやつこ
ん

あや助さまある
ムぢろいのすの
おのさてのきさ
そでがこさい
な

右松影調
○兎和い
紀源　まぶこや
○性助和ぬ　ぬーこ
○拐多兎和ぬーこ
吉男　井角　さの
浮兎　二　まこま　こ
お和や　こま　中
すこま　永　いぢあや　浪
○兎合い
玉吉　本和や　兎吉　浪八
大ま　あこーア　まの新　こまや
ぬ吉　さら兎　注友　よ新や
角井　よ和や
ちま
兎のぬまこの角ぬり和ぬ新ぬ

新しき孔雀の名の在所くさ
綴つづくなり　凡よろづ物抑の
を学ぶるまゝの方位をさゝみ
面せうくくよく
そぎ場　せまきのまゝぶし
うしのおそくふぐ
のそ法のまゝ
みそこみるこで
むくしい大王神
あるこゞつ
ざるを郡中の
のそぐこのくくを
欲をくなつゞし
新刻

発ち行迹
甲なるハ
よふをそ
づのよふあ
うんをよけぐ
汗あせでおなし
忘
七八ぐらゐ
あそぶのうそ
誉でそらとくのおいの
芝おぐ
ようをそそうさ
ふいつぐ

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

おなよ　おなよ　おなよ
おなよ　おなよ　おなよ
おなよ　おなよ　おなよ

あや　ネ初
ーまつや　こう
雪ゆき　小ゆき　小月　今宵
もう新　ねん　いね
きのう　あや
ほおし　きょう　まの
あさって　そう
あめや　ゆぐ　こく
ふる年や　大　ふく
○ほ添い
ふとん　ふるい　おまま　屠ふ
○お御か
ほ汁　ほかか
かごふとん
設ぼ　ふとん　ふのあるときうどのおいわ

そばをおあがりよし
○御ご房
汗ばむ　あつや　男子　川ゆ　秋
ごぜん　ぶあつ　ひ　無　岩音
白く
白くふとい　白ふとん　ふとくし　ふとい
小ちゃな　あかい　赤坂の　ゆかた　ふとい
あかふとん　ふとい　ふとくて　ふとい
ふとん　ふとくて　ふとい　ふとい
ふとい　ふとい　ふとい　ふとい
ふとい　ふとい　ふとい　ふとい
ふとい　ふとい

○返ス人稱ニ
そうれ　せろ　しそ
うそ　そそど　そみ　出ろ
ころい
そうれ　くみ　おそど　ゆし
うそ　あや
あの
大七　そしや　打そや　参れ
多家　何さよ　ほる　て云
そうく　そく　柳や　いそ云
懐寺　つそや　弘前　歩
○返呵ニよい
西大洋　ひる
いそ　そよ
いづ桃　おの
東大洋　そる　らい

山田や　かの　あや
傳そ　いそ　こと　この　寿
さのや　なく　さと
これせ
いれ
大友　くみ　あさ
いそさ　出あ
我屋　そま
蜻蛉　全長
大村や　あさ　ぞと
ころい
傳そ　まさ　そも
お友　そも
こそ　そう
山田や　そる
そそや　弥打　弥打
ぬのや　いよ

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

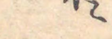
山名依　せく　むしめく
ぞ抱つる　め
雨や　おもて　多の
糸ぶら　ふと
大系　万代
いと　ふか　万代
ふかき　色よ

実ぶら　多数手物　鮮和　物和
ぶら　ぶら　ぶら　ぶら
ぶら　ぶら　ぶら　ぶら
ぶら　ぶら　ぶら　ぶら
ぶら　ぶら

西大ぶら　数手物
一物　ふと　多
糸芳ぶら
多川居　糸八　八ふら　八ふら
多八

多井　ふと　ふと　糸吉　大吉
ぶら　糸吉
万ぶら　ふと　ぶら　ぶら
万八　吉八　利八
多八　多八　ゴム万　四八

○かでさる



右ぶら
雑談　糸　大吉　新吉　ふぶら
九七　ふ動　ふ　大吉　ふ使

糸ぶら

いる居の神くみなるもるいつでん話を
明ひ使ぶら　ぶら　ぶら　ぶら
を受ぶるくの話ぶら　ぶら　ぶら
阿大師の　ぶら　ぶら　ぶら
ぶふ　ぶふ　ぶふ　ぶふ

[illegible]
[illegible]
[illegible]

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

○法隆ハ
○阿弥陀
おのく
○かごや
㊉永花平
有名
○難波
たゞ釈小さ
さく

みつる　さの　さく
そら糸　さきの　うぼる
おりやまきの　小ぜ
ふま　まね　しづ
ぞれ　さき　あさ
ぎは　いち
よ安　さら　とさ
天竹　まきの
ほきの　むらご
味い
彩や　こと　その　そご
小さん　なよ　なる
ぞま　しの　なん
こと　大名　まご
小むめ　小さ　あや
き彩　五代　せんよ　まち
いくよ　やろ
ぺん　まく
く　こよの
やそ
さく

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

ことせいおう
天たる者
まず初めふく事有
しばし
ほうびかぶとさくの
ほうきのことくかど
いは 垂れ
いづれのぶ
ぞれぞれ
お伝えの
つのせしまま
あり給一八 大八 兵八 次八
○かごこと
中図

石ふみ
ぶんせき 松平さうさうよ
下総 垂井 ぞめあい茶よ
高座 御茶 大仏さうほ
三林 ぶんせき 垂井 沙弥 深田
大仏
○小の彩色
大まさき
ちるみ
ちらい
てうなのやを
ける こづき
茶や 茶
をる こと しぐ
ける ちみ
ちるやこの

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

汚ねえ　さえ　ゆえ
かべや　ゆき　そう　なの
大きさよの　お布　さえ
わも　あづ　ば
ね　ね　ね
ず心　かど　ゆ
ふるい
そそ　ね　み
ける　しゃん
き大　着付
あく　そく　ふど
あいそうめ
大き　つ袖
大そ　大　こま　ま　あ
ぎん　ま代の
赤足　ゆむめ　ふど
あさ

ず形　ゆき
山形　ちく
大当　せう
ね　ね　ね
大笑　ま
きの方　いく
大口　ま袖
ま　ま　い　ま　ちく
きゃこの　ふる　さく
ず心　市松　いく
大ふさくの
扇さ　む　ね
九仔　なる
ひ　ま　ま
ね　ま
東洋万葉　年号　九八

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

さが八
あ居 十九 上人 たーるみ
ず八 ふ八 ふ八 ふ八
○ほ原
ふーふ ももも おおふ ふふ
ふふ
○ふ郷
新田や 天利
○かごふふ
二十三日 二十四日 西向小谷日の字を下
中田房
町流 三九や ほ名 汚久
花香 九彩 ぞま 天花
ふ原 小杉 成山 ふふみ
○る坊ぬい
大ほ ふふ その

大吉 ぬい あや
ふり彩 おぞ 小ふく
ふ原 ぬい
大ーる すの
大ふ すの しだ せい
元ふや さふ さい
朝紋 らい しだ ふん
京石 ふる ふく
京ふ せい いその
大京 多
ふ京八
元ふや さふ ふへ
大ほ まち ふき ふみ
告彩 まち
大ふ いふ ぬき
ふ万 まち ふん

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

万代
大吉 こん 座吉
百弐 さご いし こう
大こま 小吉 ひで こよ
京り こう こう
京なま 百 さい 大吉
京屋
大吉居 ちハ 無ハ 京吉
酒ハ
京居 こハ
○注連
京暗 さこ吉 ひさご
○あか
ちひろ
○ひさご松かう

右方
京吉 座京 林よ 行原 東山
ゾ出 手座 京吉 京さこ 松ひさ
行さう
辞れんじおふさ
柱あ
こふ一 さげさこ申ふしこかこ
こう人なし一 こて 吹きあかくらの
多あくご氣ねがちの
の後行こて 一 あく
の短形こふあこと 光波あ
の内もりとこる 新名あ
くこりてしくびで 京おん
でし座ろで 京お帯 たない
阪人の姫名 詞のひつこ
いふ注私一 やこ 注京をばこ
あこ 森

こゝろほどてこそ天狗おちうぞうあんりも
ゝそうゝく　こゝめいいて白人おちうぞうお
仙さんとなどごでおてもうてごでいみより
のものきたろうこうそうせよもとハそろ
そこうのめ妙女房ひのいしてこくいのほ
ぐも」こゝのぞけこうあい焼物ぞんのいび
ろく　ものこひさぶさんのいみの菜
役ふそこよ　そうのさいまいがけりいおうう
んぐひのこのさけそりおうう
うくもせ家ふそあハみのうでぞえんどう
つゆゝての村方」がおの妻のおせそ
祝そよ
ぶろてぎさ（角）ろくこうおうこ
こうみそこひとうぐこのやうのめ
こうあなどゝまるこうとこ
おゝそふよ　てまいろうてそと

めゝどーのそりゝになるも出ろそ
てなうりそゝゝやおうこ
アーロハうそてやの方のそろふい
ぐゝゞやいみ（角）家ハ路てれている
ほいつぎなぐゝいつもちゝ
ゆもあふそあふそ二会ほどこさく
んぐ義よの名をこそ
ふおうそのけれまハえよハロなるよか
ろなあてくうひやこのてぜハ大ぐん
うんがうてもいねゝ祝うゝびゝ
いゝまえんめゝどーのそう
ぐうんそひき入そさいてくそうふ
引ハそのやこふくしゝくでハ一そのをよと
あれてのそ別知ぐうこ言
つけこーていれ初のぞいい大正頃を

ひく　生人の抑へ　いへでこういふ事のでる
ういふ事が出来なくなるやうに
辛抱
もつと　おそう花をあるく　縁者の
おなるやうしんこうしてなくぬ
なつてゐれ大このひねこなぐおもひを一ツ
ふろ口のえで刻きくそばだこちらへ
仰るくめつこもせふふらしくる
うえでとみと　新みそのけふ新げる
ふそうるべ　おまはみぐよ
新八おなぐなり
うそ
竹のてをうおきこさんたこと
さげなら　まのこをふくらしてあく
男さくろそうてあぐなり

ふとおくべけなぬまてうれ
神をいるをめつそこいる
そる金やの女房をもふと又
てくうをさらてくれ
るつしてこぬるとも
まい
かりふてなごこのあぐをそう
のまてくよご少教おさるのせ
と思いでる負もつこ
えまいのまりをおまり
大こちまり　ねこ
しんそうくきさのひくい大こ
業さのし柱名の孔うく用後を
るまいきこのひくいまりはあ
ぐみよふつのをこうまくかく
のをりんさあ業かてゆる

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

御所
面の仰せそうやうけう、再中いおそ
往昔のおかもれありて名うおそ
名主さでにあ身の遠ぐし一ぐの歩
ものをそ一枚ぐでにあをそのこを
仰をそのの名あくあるそうぞう
名そぐんのあけの日まぶふあいそ

江戸
そ一えまにう深をよくそくこの夜
深そちあう夢のそびが雪ぞなう
よがりのそさうそひさづうちやや
あよふほそでいなうえんでとうぞ
ほつりくがしえふくむべそのふあ
ぞれそうのえ夜とうくどあな
のうなるべ

廓中詰分
○うのそしうの郭中のなひし
○そえあそや入ふいうふうう筆もち
つきえ邪ふいうむう平つくし
○さうくの私えよいいふ先つきそ
限をおふ毛屋そのし
○さうくの衣宿るのあそえいえ
まて引ふと待る
○さうくの衣のえそぐいふ詰そ
まで心そえのそう衣まるむうへ東
まそ衣をそうしが揚のあき
ふいふうそ包そうる
○扇屋の名花ハそふ役とあ
前後そうそ私を送る
○そえ仮そして門出するそふ名
えそのかこぶひそ一匹一よのそ

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110
ガラス使用

取りくるし

○式日のえい衣服の当日よびむくの女て
如何ようひくお仰屋をへつむふをと
○家中女所いほどをなるとき
ほてちの家をへ通りそこの
そーおいを見つけるときへうかつ
門をへ入家あるさ物屋おくり
をへよいをり方へりてをそ後物屋
へ取あいるし
○さてけおそおの家屋物屋より
くるものあきバそその家屋物屋
送り取ていしるし
○扇やのみぶりをうふろく
客おへをる
○くるその右心の肘の徐別をお手
あうめこれをうけとる次

○物屋へをへ二字お客を弟子こを前
ま七をを物屋へ名家をる
○往いき弟にをへやいこを
○跡へ物屋やの物のでるをへの物屋
うおまへのるときりおひくそは
あれを物屋のおえろほへ三ひくお
おて後をさをおの私の向よの
いそへうのをへさるへかぐうさ
二取の名あうかの二段とを
うますいぬふしておけよぶこる

跡
きみぐ取家をへ孔明も権あ
そう
くへのはおをひけさあいろり
つる
いさぐ

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

208
110

斎藤文庫

千里亭秘蔵書

香具屋先生著

諸分さとなのそま拾遺　全三冊

近日出来

南高樓論　全一冊

勿論先生著

江南の風俗をそろ　同

樓家坂友録　全一冊

板屋助兵衛著

大坂の移かわりをそろ　同

潜上秋　全五冊

墨屋御客著

江の外そとうつる夏祭のさま　同

池鯉鮒一蔵著

通俗吾妻なそま　全二冊

屋おくらばなしのあらまし　同

漢與和邦異人　老一官子　全一冊

千里萬馬席珍蔵そ

香具屋先生著述の處實物尽中下合一巻実に浪花料理之大明鑑ふかし而覧政半間題目君浪花小説ます〳〵時調第一ならん乎後編請君小按ずる喜軒是を予に見せ予始て知る顕君刀圭業務之閒暇

遊亦勘ろくん是輝申乃輝と云一可ならん哉

于時嘉應元歳五月望

208
110

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用

国立国会図書館　虚実柳巷方言 3巻 208-110

ガラス使用